

□ □ □

御加算の上、御拂込有之度候。

■『興津の春』(故大下藤次郎氏筆)は昨冬の作にして原畫はワットマン九ツ切大

問ひに答ふ

■『ナポリ』(南薰造氏筆)は洋行中の作品にて原畫は水彩畫、九ツ切

□一寫生畫の研究に白き花の陰影には黄色を使ふとありしが、黄色其儘を使ふにや

■『水仙』(眞野紀太郎氏筆)昨年作にて原畫はワットマン四ツ切大

二太陽を受けし瓦屋根は黄にも亦、黒にも見ゆるが、如何なる色を使ふにや

■『淺間神社』(赤城泰舒氏筆)は昨冬の作にして原畫はワットマン四ツ切稍小

三水張してもワツシの時には、ふくれ上るがそれにて宜敷か 四大下式用水筒はハツ切箱用より大なるか(○▲生)

□本號に掲載すべく豫告せし二三のものは筆者の都合(旅行中、或は病のため)により休載の止むを得ざるに至りしが、次

一問題が散漫にて説明に窮す。白き花ととも光線の關係によりて、其陰影の色

號よりは可及的連載のみに勉むべく候。

著者の意なれば必ずしも黄と斷定するものでない。若し黄色を呈する場合は、其

□前號にても申上げ置き候ひしが、大下家に寄せられたる御年賀狀は、厚く御受け申上げ候へども、喪中にて候へば御答

の儘の使用云々は、御答への限りに非ず。二前者の問題に略等し。これは色にあら

禮を缺き申候につき、此段御承知相成度候。

ずして光りなり、無論色を以て現し得るものなれども、瓦の新きと古き、光線の

□春鳥會々員規定出來有之候につき御入用の方は送料を添へ申込相成度候。

度合、屋根の傾斜、等によりて相違す、斯の如き外光を描く場合は、他の物體と

□本誌々代として振替貯金を以て御送金の節は正規により一錢づゝ登記料として

比較、對象して適當なる手段を講ぜらるべし。色は何色と指定し得るものに非ず。

三普通の描き方にてはフクレ上る事少し充分に水貼せざる故なるべし。四大下式

用なるものを特に知らず。みづゑスケツチ箱に用ゆるものならばハツ切のもの

等しきも、厚きものは不適當なり。

□水彩及油繪にて人物研究には如何なる參考書を學びて可なるや(紀南の靜)

■専門の良書あるを聞かず、且つ困難なるべし。左に一二を紹介する。

人體畫法(岡田三郎助、川崎安共著)

東京京橋區南傳馬町一の二隆文館發行

藝用解剖學(森林太郎、久米桂一郎共著)

東京本郷區湯島切通町二五畫報社發行

讀者の領分

新年號の『みづゑ』はなんとなく、なつかしいものでした。殊に、表紙のコスモス

は『四十四年の秋』を思はせました。私にはあの可愛いらしい水鳥と、故先生の愛

兒であつた『みづゑ』とは同一のものであるやうに思はれてなりません——テツタ

ロ——